

[09] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19456>

出版情報 : Crossover. 9, pp.1-23, 1999-03-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :



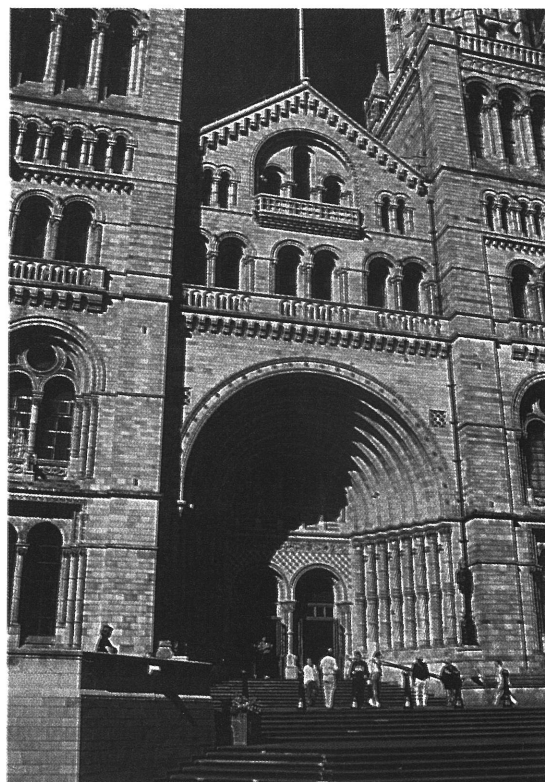
大英自然史博物館滞在記

矢田 脩
(地域資料情報講座)

私は、幸いにも平成9年度の文部省在外研究員として1997年7月19日から1998年の5月18日までの10カ月間、欧米の自然史博物館で蝶の分類学的研究をする機会を与えられました。私の主な目的は、ロンドンの大英自然史博物館に滞在することにありましたので、ここでは同博物館の簡単な紹介と私が滞在中に得た情報や感想などについて述べたいと思います。

大英自然史博物館は、ロンドンの中心部から少し西南よりのSouth Kensingtonにあります。地下鉄の駅から北方向に歩いてわずか数分の便利さです。もともとロゼッタストーンやミイラのコレクションで有名な大英博物館(The British Museum)の分館だったのですが、1879年現在の位置に移転し、さらに最近、別組織として独立し名称も自然史博物館(The Natural History Museum, London)と変更されました(しかし私たちはこの自然史博物館を未だに通称BMと呼んでいます)。この自然史博物館の歴史や概要については、これまで多くの方がさまざまな角度から紹介していますので、ここでは詳しくは述べません。一言でいえば、「世界最古の、世界最大の、そして世界で最も権威ある自然史博物館」と言ってよいでしょう。

私は、ロンドンで開かれたシンポジウムに参加するついでに、これまで2回(1981, 88年)この博物館を訪れたことがあります。今回10年ぶりに再訪してみて、そのたまたまい、内部の様子などほとんど変わっておらず、古いものを大切にしているイギリスの伝統をあらためて感じさせられました(説明1)。しかし、以前昆虫関係の一般展示があった正面左手の大部分は恐竜の展示に模様替えされ、また、無料だった入場料も十数年前から有料(大人6£, 子供3£)となっています。それでも、近年の自然史博物館人気の高まりのせいか、夏の間は、世界中から集まった見学者で連日あふれかえっていました。秋になると一般の観光客はかなり減りましたが、それでも1年中、内外から訪問者が絶えることはありません。最近の観光用ガイドブックには、「恐竜ブームに乗って、ロンドンでもっとも人気のある博物館」「ロンドンの中でもっとも面白い博物館」などと紹介されています。



説明1

大英自然史博物館の正面玄関。年中見学者が絶えない。

1997年9月撮影

しかし、研究者の側から見れば、この博物館の真骨頂はその楽屋裏にある標本類にこそあります。リンネの時代から営々として蓄積されてきたこれらの標本類は、数こそアメリカのスミソニアン博物館に及びませんが、その質的価値は世界の自然史博物館を圧倒しています。中でも、タイプ標本は格段に充実しています。私が研究対象としている蝶類では、ここに来て標本を調べないとまとまった分類学的研究は不可能といってもよい位です。タイプ標本はそれぞれの生物種のいわばメートル原器に相当するものです。しかし、メートル原器と違ってきわめて壊れやすく保存がやっかいな上、多様な生物種を反映して、何千何万という多くの種のタイプ標本を整理・保管せねばなりません。このタイプ標本の重要性は、とくに我が国では生物学者の

間ですら十分に理解されていません。しかし、生物多様性保護が世界的に叫ばれるようになって以来、タイプ標本をはじめとする標本の価値とその重要性が広く認識されるようになってきました（説明2）。

BMの大きな特徴は、ここが自然史の標本・資料の収蔵のみならず、自然史研究についても世界の殿堂と呼ぶにふさわしい点です。BMには、研究部門として、動物、植物、昆虫、古生物、鉱物の5主要部門があります。私が滞在したのは昆虫学部門ですが、この部門だけでBM本館の西端にある地下1階から4階までの大きな建物全体を占めており、総計120名近くの昆虫学研究者あるいはその支援者がいます。このうち常勤職員は約60名で、それ以外は研究助手の形の非常勤職員、Ph.D. 大学院生、私などを含む長期・短期の訪問研究員 visitor などです。世界の自然史博物館の中でこれほど多くの昆虫研究者をかかえている所は他にありません。とくに、優秀なPh.D. 院生が博士論文を書くために世界中からやってくるのはさすがBMだと思いました。

さて、私が以前にBMを訪問したときから、昆虫部門の蝶セクション（課）が私の受入口になっていました。しかし、1991年に行われたBMの組織改革にとも

ない、昆虫部門は生物多様性、昆虫・植物の相互関係、医動物、分子系統学、標本管理の主に5つの課に分けられ、蝶、甲虫といった昆虫群別の組織はなくなりました。私の引受人である Vane-Wright 氏は、かつては蝶セクションにいましたが、今は生物多様性課に属し、かつ現在は昆虫学部門の部門長を務めています（説明3）。この課は、生物多様性の重要性に鑑みていち早く組織されたもので、昆虫部門の中でもっとも規模が大きく重要視されている課です。さまざまな昆虫群はもちろんのこと、植物や動物などの専門家も加わり、学際的な研究、プロジェクトが活発に行われています。数多くの研究テーマに取り組んでいます。目下、BMがとくに力を入れているプロジェクトの一つは、世界の主要な昆虫群を対象とし、分類を中心としたデータベースを構築し、インターネットを介して世界中で利用可能とすることです。今、生物多様性の保護の取り組みの中で、とくに緊急に要請されているのが、種目録（インベントリ）の作成ですが、この作成のためには、タイプ標本をはじめとした標本にもとづく分類学的な研究が不可欠です。しかし、昆虫の多くはいわゆる超多様な名前についていないグループであり、全世界を網羅した完全な目録をつくることはほとんど



説明2

大英自然史博物館昆虫学部門に収蔵されている蝶類（キチョウ属）の一般標本。

1998年1月撮影



説明 3

大英自然史博物館のスタッフ（左：世界の蝶の図鑑をまとめた D'Abrera 氏、中：昆虫学部門長の Vane-Wright 氏、右：筆者）。右手奥に私に与えられたデスクがある。

1998 年 3 月撮影

不可能です。この中で、もっとも容易に世界の目録作成が可能なグループの一つとして蝶類が選ばれ、全世界の蝶類および大型蛾類の目録作成とこれに付随した分布、生活史などの諸情報をデータベース化しようと遠大な計画をスタートさせたのです。

さて、私は BM 滞在の第一の目的を、チョウのタイプコレクションなど標本類を調べることに絞っていましたので、昆虫棟の 1 階（日本流の 2 階）の蝶の標本タンスと隣あわせの場所に専用の机をもらいました。ここでは、私が調べたいタイプ標本、一般標本、文献類など研究に必要なものはすべて手の届く範囲にそろっています。BM の多くの研究者は各階の中央に位置する標本タンスの周辺に机を並べて仕事をしています。この配置は研究には最適なのですが、標本と人が同居するため、禁煙はもちろんのこと、仕事場での飲食は一切禁止されており、所定の「飲食コーナー」のみで飲食が許されています。ここでは、昼食時間と午前 10 時と午後 3 時のティータイムには、研究者たちが三々五々集まってきておしゃべりやら情報交換をやっています。各国からさまざまな研究者が集まてきますが、とくにヨーロッパに近い熱帯アフリカ各国の研

究者たちが目に付きました。彼らの多くは、熱帯の衛生害虫の研究プロジェクトのメンバーとして研究、研修に参加しているようでした。また、夏休みの間は、動物学専攻の大学生がボランティアとして昆虫標本の整理などを手伝っていました。また、地元のアマチュアの蝶屋さんがボランティアで標本整理に通っているのもしばしば見かけました。

私の席の隣はおもに短期 visitor 用のデスクとなっているために、私の滞在中に、英国人はもちろん海外から来た多くの研究者と知り合うことができました。このように、居ながらにして世界中の研究者と交流できるのも、ここの得難い利点です。ただし、これらの visitor たちからアジアやアフリカの蝶に関していろいろ質問を受けたり、同定を頼まれるなど、対応に結構忙しくなってしまうのはやむを得ません。しかし、このような依頼をこまめに受けることは大変大切なことを悟ることができました。依頼を受けたことを忘れてしまった頃に、依頼者からサイン入りの豪華な本や別刷の贈呈を受けた時は本当に嬉しかったからです。

ペテルブルグの図書館事情 (1998年5～7月)

博士後期課程1年 赤座孝朝
(国際社会文化専攻)

筆者は昨年(1997年)の5月から7月上旬にかけて丸々60日間、ペテルブルグに滞在し、もっぱらシチェドリン記念ロシア国立図書館にこもりつつ資料の収集を行った。ある意味で謎の部分の多いロシアという国に関して、図書館という極めて制限された世界ではあるが、それを通じて少々述べてみたい。なお、私の滞在時期は通貨危機の直前の時期であり、銀行での大雑把な為替レートは、1ドル≒6ルーブルで、1ルーブル(=100カペイカ)≒25円というものであった。

図書館の入館から文献の借用・返却、退館まで

図書館の開館は大体午前9時であるが、曜日または時期によって異なる。玄関をくぐると、まずコートと手荷物を別々に預け(コートが右側、手荷物が左側)、入口へ向かう。ここで入館証を提示し、10×15cm程のコントロール・リストを受け取る。これに自分の名前と登録番号を記入する。ちなみにこの紙は図書の出借及び返却の証明となり、更に館内持込(パソコンや辞書)の許可印が記され、退館時にはミリーツィア(警官)に提出しなければならないので、紛失は許されない(もっとも筆者は紛失したことがないので、紛失するとどうなるかは不明)。

入館証の発行は、パスポートと写真2枚(2.5×3cm)を持参し、かなり面倒くさいアンケートに答え、5ルーブル支払うと発行してもらえる。写真は街中のスピー

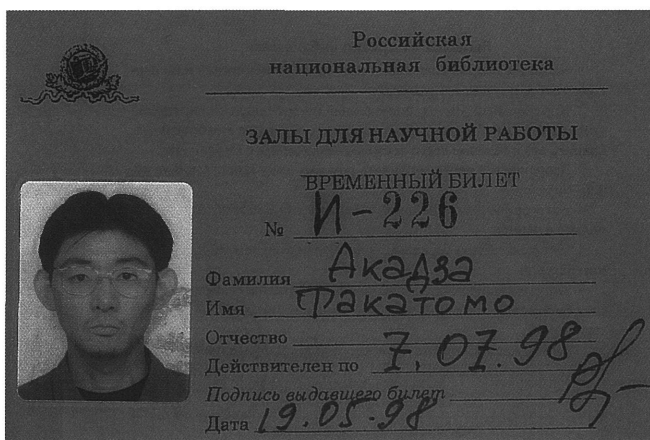
ド写真(4枚1組で25ルーブルぐらい)でもかまわないが、このアンケートは曲者で、とにかく質問が細かく、延々と20項目近くを書かされる。ちなみにロシア人は1階のカウンターで発行してもらえが、外国人は2階のカウンターになる。このカウンターはよく使うこととなる。パソコンや辞書の持ち込みの許可は全てこのカウンターで行われる。

こうしてチターリヌイ・ザール(読書室)デビューを果たすと、次は文献の借用である。まずは入口近くのカウンターに置いてある10cm四方程度の借用請求書をとる。これは今は懐かしきわら半紙である。これに必要事項(自分の登録番号、シフル、文献の言語、著者名、文献名、出版地及び出版年、請求日とサイン)を書き込むわけであるが、面倒なのはシフル(請求番号)である。

文献目録のデータベース化は恐らくやる気すらない。従って昔ながらのカードをめくってシフルを調べることになるのだが、カードは1931年以降の分しか存在しておらず、それ以前の文献に関しては調べる必要はない。またカードは著者名別と分類番号別の二つに分かれているが、分類番号別の方は、どう考えてもカードが少ない。

こうして借用請求書の記載を完了させると、チターリヌイ・ザール内部の最初のカウンターに提出し、判子をもって奥のカウンターに出す。そこで一番早い便(ザールに文献が送られてくるのは大体時間が決まっている)を教えてくれるので、その時間を記入して請求書を提出する。カウンターのお姉さん(カウンターの人はなぜか若い女の人ばかり)の機嫌次第では、向こうでさっさと書いてくれる。

ところで、請求どおりの本が来るとは限らないのが、ロシアのロシアたる所以である。事実筆者もことごとく裏切られつづけた。どこをどう間違うのかは不明だが、1895年の大蔵省の出版物が、1888年の売春婦調査報告書に化けて出てきたなんていうのはザラである。ましてや紛らわしい文献(特に統計集)は気持ちにゆとりを持たねば体が持たない。ちなみに一度に借りられる文献は5件までとなっているようだが、そこらはか



筆者の入館証 No.の所に記入されたアルファベットと数字が筆者の登録番号

なりアバウトである。

請求した文献はカウンター内部の書架に利用者別に置かれる。カウンターでコントロール・リストを提示すると、書架にある文献を持ってきてくれる。そしてコントロール・リストに貸出冊数を記入する。返却時には、次回の来館時にも必要かどうか聞かれるので、必要に応じてカウンター内部の書架に文献を残してもらう。そしてリストに記入された貸出冊数と返却冊数が一致したことを確認して、リストに返却の印が押されるのである。

退館時はミリーツィアによる荷物のチェックを受ける。その時にコントロール・リストを提出し、手荷物やコートを受け取り、図書館を無事退出となる。

複写の方法

複写は、とにかく面倒くさい。まず借用請求書と同

К 0207	К 14 ³⁰ час.
Читальный зал для НАУЧНОЙ РАБОТЫ	
Билет № И-226	
806	
Шифр _____	
На каком языке <u>Русский язык</u>	
Автор <u>Департамент Торговли и Мануфактур</u>	
Заглавие <u>Свод данных о фабрично-заводской промышленности России за 1895</u>	

借用請求書の記入例

上から順に 日時 時間 (これらは文献を受け取る日時)
シフル 言語 著者 題目 出版地・出版年
請求者名 請求日である

じ所に置いてある複写の申請用紙 (なぜかこの用紙だけは紙質がいい) に記入するのだが、この申請用紙がなくなっていることが多い。筆者は別のザールにもぐりこんでそれを入手したりしたのだが、時としてそれはどこにも無い事がある。そしてこの申請用紙が面倒なのである。借用請求書への記載事項に加え、複写の部分の指定、更には総複写ページ数まで記入する必要がある (もっともその辺はかなり適当だが)。

申請用紙の記入が終わると、それをルースキー・フォンドという別の読書室へ文献と一緒に持って行く。ここでチェックを受け、申請代を支払う。基本的に申請

代は3ルーブルで、1931年以前の文献は5ルーブル、全ページの複写はこの3倍の料金が取られる。なおサイズの大きな文献 (A3よりも大きな文献) はコピーしてもらえない。この申請用紙と複写部分に適当な紙を挟んだ文献を複写室に持って行く。複写料金 (申請代とは別!) は1枚1ルーブル20カペイカ「いい値」がするため、殆どのロシア人が数ページの複写にとどめている。複写は係のおばさんがやってくれる。このおばさんたちは実に親切なのだが、本の扱いは少々雑なため、古い文献だと結構背表紙が割れたりする。筆者は滞在中に24冊もの文献を「壊して」しまった。

複写室の利用時間は短く、また曜日によって異なる。どれほど待たせようとも、時間が来れば親切なおばさんも鬼と化す。特に複写頁数が多い場合は、注意を要する。更にもう一つ。小銭の準備は非常に少ないので、小銭は大量に準備しておいたほうがよい。

最後に

駆け足でロシアの図書館の利用に関して述べてみた。残念ながら筆者にはロシア以外の外国の図書館利用の経験が無いために、これが便利なのか不便なのかは判断しかねるのだが、一言だけ言えるのは、そこはおおよそ効率化といった概念とは無関係な世界であるということか。利用者軽視というよりもむしろ敵視とでも言うべき事務処理の状況は、国の名は変われど彼らの中で脈々と受け継がれているかの如き様相である。さらに馴染になると、格段に待遇が改善されるということも相変わらずである。

こうした「相変わらず」の点は、何も図書館に限られた話ではない。ゴルバチョフ以降のソ連・ロシアの激変も民衆には何の変化ももたらさなかったような気にすらなる。だが、変化が全く無いわけでは決して無い。何かにつけては金を要求する、所謂「不良警官」は一掃された。一般の商店においては、サービス精神の芽生えも感じられないわけではない。政治史上の動向が、一般民衆の生活レベルにおいて、どのような影響を及ぼすかは極めて大きな問題であるが、筆者としては、この問題に対する事例をロシアに求めたいのである。

「1998年ハノイに行く」

修士課程1年 城山 愛
(国際社会文化専攻)



『ハノイ36通り』。ベトナムの作家タック・ラムによって1940年代に書かれた小説(エッセイ集)の題名だ。この小説には首都ハノイの中心部ホアン・キエム湖の北にある旧市街地の36の通りの様子が描かれている。「ハノイ旧市街地の風物・人・食べ物について繊細な筆致で描写したハノイ賛歌である」という評を見たことがあるが、私自身はまだその小説を読んでいない。ベトナムの作家がハノイをどう記述したのか、ベトナム語をマスターしたら読もうと本を買ってきて今は本棚にしまっている。

今回私が訪れたのはその「旧市街地」だ。多分ベトナムの中でも最も道が入り組んで分かりにくく、また喧騒に満ちた地域の一つだろう。2週間ほどのハノイ滞在期間、毎日その道を歩き回りまた道に迷いながらたくさんのものを見た。

「ベトナムの最近の様子を書いて欲しい」という依頼を受けたときに、何について書くか随分迷ったが、タック・ラムにならってこの道を歩きながら見えたものを手がかりにして、私の見たハノイについて書いてみようと思う。これを読む人がハノイの道を歩いているような気持ちになって貰えれば幸いだ。

*

ベトナムの道路にはバイクと自転車が多い。道路の真ん中を時速30km位の速度でホンダ・カブや自転車やシクロ(自転車の前に客席を設けた力車)がすいすいと走ってゆく。そしてその外側には天秤棒を担いだ

女性が走り、客待ちのシクロやバイクタクシーのおじさんが喋ったり昼寝したりしている横を追い越してゆく。

ベトナムの道を歩いていると旅行者が思わず笑ってしまうものがある。その中の一つが、道路をまるで銀行ギャングのような格好でホンダ・カブかドリームに乗って走っていくお姉さんだ。彼女たちは南国の強い日差しを避けるためつばの広い帽子を深くかぶり、サングラスをかけ、鼻から下の顔半分をスカーフを巻いて隠している。日差しを避けるためとはいえ、肘まである手袋までして完全武装したその姿を見ると、その絵にかいたような銀行ギャングスタイルに思わず吹き出しそうになってしまう。

だがその怪しい姿に見とれていると「絵はがき売り」に捕まってしまう。彼らは駅弁売りのように首から紐をかけ胸の前に台を下げ、絵はがきや「英・日・越会話」の小さな冊子を売り歩いている。よく見るとその台は段ボールに紐を通して作られている。実に元手のかからなそうなその商売を請け負っているのがだいたい20才位までの子どもや若者だ。「ハイ、マダム」と彼らは声を掛けてくる。彼らのほとんどは英語や時に



は日本語を片言でも喋ることができる。一度「あなたは日本人ですか」「ポストカード買ってください」と日本語で話しかけられ、「私はもうたくさん持っているから要りません」と断って去っていると後ろから「ばか、ばか」と大声で言われたことがあった。一体なぜ片言

の日本語の中でもわざわざそんな言葉を覚え、そしてそれをわざわざ私に向かって言うのか、罵声なら自分の言葉で言えばいいのにとまるで日本語自体が馬鹿にされたような気持ちになったことがある。彼らはたいていの場合はしつこく、時には走って逃げなければならなくなる時もあるが、人なつこくもあり、道に迷っていたりすると親切に教えてくれたりもする。

絵はがき売りの3人組の少女たちがまるで遊び相手を見つけたように騒ぎながら私の乗ろうとしていたシクロにまで東になって乗り込んできたことがあった。「あなたいくつ?」「どこから来たの?」とお互い英語で喋りながら私が「あなた15才なの?学校に行かなくてもいいの?」と尋ねると、「学校は卒業した」と答えたあと「いい、ベトナムではみんなが上の学校にいけるわけではないのよ。行けるのはお金を持った一部の人たちだけ。絵はがきを売ることは私たちのjobなのよ」と言っていた。jobという言葉がどのような意味内容を含むのか私には分からない。jobといえるほど収入を得ることができるのか、そしていつまでその商売が成り立つのか。彼女たちは道を案内してくれたり、私の試行錯誤のベトナム語を正してくれたりしながら、私をていっのいい遊び相手にしながらもしっかりと「案内してあげたでしょう」と言い、結局私は絵はがきを2冊と彼女のかぶっていた「ノン」という編み笠を巷より少し高い値段で売りつけられてしまった。

バイクが走って行く道路から反対の道の端っこの方に目を向けると、屋台が並んでいたりする。「カフェ」やベトナム式うどん「フォー」を提供するこの屋台は非常に簡素なもので、時には屋台を作るための道具を全部天秤棒で運んで来ていたりする。彼らは屋台主も客も地べたに座っているような低い姿勢でいながら決して地べたには座らない。よく見ると風呂場に置いてあるようなプラスチックの椅子に座っている。この椅子を置いてさえいれば道路に座る場所とその正当性を確保するとが出来るのだ。歩き疲れた時にそこで何度か飲食したが、値段はまちまちだ。たいていが外国人とみると値段をふっかけてくる。食べた後で高い値段を言われてもなかなか文句が言いづらい。食べる前に値段を確かめれば済むことだが「いくらだ?」と聞いてから座るといのも何となく野暮ったい気がして、私はベトナム人の客が先に座っているところを見つけてそれと同じものを選び、その客が立ち去るときに同じ値段を支払うことにした。これなら屋台の人

もふっかけることはない。そうやって分かった相場はフォー一杯でだいたい5000ドン(約50円)ぐらいだった。

ハノイの道は面白い。見ているとそこが商業空間として公然と認められた場所のように思える。しかし一応公安は道端でそんなことをするのはけしからんということで取り締まりを行なったりするらしい。だが「蠅を追い払うようなものだ」と公安の人は表現するという。公安の人が注意すると商売人たちは去って行くが、しばらくするとまたどこからかやってきて平然と商売をしていたりする。もしかしたら取り締まりというのは建前であって、「蠅を追い払い」ながらそれを完全に駆逐するような対策を採ろうとしないのには何か別の理由があるのかも知れない。

ハノイの道がこれからどうなっていくのかは分からない。ハノイの町もドイモイの影響もあってどんどん変わっているという。そんな変化のただ中にあるからこそ、天秤棒で移動する屋台、絵はがき売りのような簡素で移動が自在なスタイルが多く見られるのだろう。車社会が日本の道路を整備し、秩序立てていったように、ハノイの道も「道路というオープンスペース」での現在あるような機能を手放してゆくのだろうか。数年後にはバイクタクシーやシクロのおじさんたちが客を乗せて走りながら「おーい、ハン・バック通りはどっちだ?」と叫び、あっち、あっちと屋台のおばさんたちが数人で指さして教えてくれるなどという光景も見られなくなるのかも知れない。そして整然とした町並みと道路が出来上がったとしたら、屋台や絵はがき売りの人々は一体どこにゆくのだろう。昼間からホアンキエム湖のそばで将棋を指していたおじさんたちやそれを観戦しつつ議論しあっていたおじさんたちは?ハノイの町と道路がどんな風にかわっていくのか、私はまた見ていきたいと思っている。

